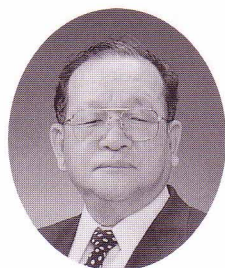


3歩進んで2歩下がる、着実な一步一步を



「少子・高齢化社会」という言葉が毎日のように新聞・テレビをにぎわせ、ややもすればこれまで日本を支えてきたお年寄りが社会の邪魔者扱いされている。育児ストレスによる幼児虐待や子ども同士のいじめ、自殺・・・ひと昔前には考えられなかったこんな風潮が社会現象として定着してしまっている。

どうにかしなけりゃいけない、子どもも障害者もお年寄りもみんなが仲良く楽しく暮らせるように、市民みんなで知恵を出しあって住みよい茅野市を創りたい。平成7年当時、会うたびに市長さんが憂いていたこんな思いが、後の「茅野市の21世紀の福祉を創る会（通称：福祉21茅野）」の始まりでした。

平成8年3月、呼びかけに賛同していただいた個人や団体からの委員21人で福祉21茅野がスタートしました。自分たちが日頃感じていること、こうなって欲しいという希望を出しあい、自分たちの活動の枠のなかに止まらず、広く意見や情報を交換し、単に行政に対して要望するのではなく、自分たちでできること、行政にして欲しいことを議論してみようという取り組み、「行動する提言集団」が産声をあげたのです。

事務局として参加する行政の支援を受け、現状や課題を検討し、同時に「福祉啓発ビデオ」3巻を制作して市民にPRするなど、3歩進んでは2歩下がるような地道で一步一步を大事にする活動でした。

発足1年後、分析された課題をさらに深く検討するための専門部会の設置に取りかかり、社会福祉協議会の地域福祉活動計画策定委員会とその専門部会、市の障害者計画策定委員会との役割分担を整理し、いつしか約180人が参加する大きな輪「やらざあ100人衆」へと広がり、夢は大きく語りながらも緊急の課題に対しては即応性のある議論を進めてきました。

平成10年6月、「仮称：福祉21ピーナスプラン素々案」を打ち出して茅野市の地域福祉の方向性を明確にし、やらざあ100人衆や地域福祉懇談会の場で市民の皆さんに理解と参加・参画を呼びかけ、平成11年2月に「地域福祉計画策定委員会」が設置されてからも、常にキャッチボールを繰り返しながら策定作業を進めてきました。

このようにして策定された「福祉21ピーナスプラン」は私たちの活動の終着点ではありません。むしろ、保健福祉サービスセンターの開設という行政としては画期的な対応によって、市民と行政が同じスタートラインに立つ出発点だと言えます。まだまだ検討しなければならない課題は数多く残っていますが、市民の夢に向かって確かな一歩が踏み出されたものと確信しています。

2000年4月

茅野市地域福祉計画策定委員会

委員長 土橋善蔵

(福祉21茅野 代表幹事)